

普化宗と尺八と虚無僧

仏教普化宗は禅宗から派生したもので瞑想の一形態として尺八の演奏を取り入れています。普化禅の実践者には虚無僧、つまり「虚無の僧侶」がいます。虚無僧は伝統的な僧侶であり、托鉢修道士で、多くは葦で編んだ帽子をかぶって巡礼を行い、尺八を吹いていました。

虚無僧は一般的に江戸時代（1603 年 ～ 1867 年）によく見受けられ、かごをひっくり返したような形の顔と頭を覆う帽子によって識別できます。この身分を隠す習慣は自我の不在を象徴しているといわれています。彼らは幕府の関所によって旅行が制限されていた時代に、巡礼者として全国を自由に移動することが許可されていました。浪士や普化宗に関係のない人が旅のしやすさと衣装による匿名性の恩恵を受けるために虚無僧の衣装を身に着けていた可能性があります。

普化宗は 13 世紀にのちに興国寺住職となる心地覚心（1207 年 ～ 1298 年）によって創立されました。覚心は中国で数年間を過ごし、無門慧開（1183 年～1260 年）などのチャン仏教の禅師に師事しました。無門は日本の禅仏教の中心となる教えをまとめた『無門関』を著しました。覚心は尺八楽譜とともに無門の教えやその他の教えを持ち帰り、帰国後に普化宗を設立しました。

普化宗の人気は時間の経過とともに衰え、虚無僧は主に江戸時代の日本のイメージとして残っています。とはいえ、尺八は今でも禅の儀式や瞑想において重要な役割を果たしており、京都の妙安寺では普化流の尺八が受け継がれています。興国寺では虚無僧による尺八の儀式など、寺内での祭りや行事を通じて覚心を祝っています。